

優秀賞 全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞

先人からの贈りもの

北海道 岩見沢市立豊中学校

三年 武石 早代

「もう少しで刈り入れだというのに、また全部、だめなのかね。」

私の住んでいる町、幌向は、石狩川に隣接しているため、数えきれないほど何度も洪水に遇ってきました。その昔、明治初期に幌向の開拓が始まる頃から、幌向の住民は洪水と戦ってきたのです。でも、私は生まれてからずっと幌向に住んでいますが、一度も洪水に遇ったことはありません。なぜなら、今は川沿いの堤防もしっかりと築かれていて、よほどの大雨でない限り水は上がってこないからです。ですが、この水害の多かった幌向の地で今私達が安心して暮らせるのも、先人達の計り知れない苦労があったからこそなのです。

「とにかく、何とかならんもんかなあ。」

私は小学生の時、学芸会で「幌向の夜明け」という劇を演じました。これは、幌向が開拓され始めた頃、水害に悩まされていた開拓者達が話し合いの末、力を合わせて堤防を築き上げる、という幌向らしい劇でした。私は幌向の村人役でした。私のセリフは「なあ皆、こうなりや周りばかり頼っててもだめだ。俺達の手で、堤防を築くべや。」と、その費用はどうするのかという問いかけに「皆で出すんだ。」と答える二つだけでした。しかし、私はこのたった二つのセリフを言うのにとっても苦勞しました。なぜなら、皆にお金を出して堤防を築こう、と提案する大事なセリフだからです。昔、お金もなく、洪水で疲れ果てた開拓者がどれほど思い切っこの言葉を発したかと思うと、この言葉がすごく重く感じられました。今、堤防を築いてしまわなければ、村は毎年洪水に苦しめられ、村を出ていく人をまた増やしてしまうだろう。どうにかしなければ。そんな気持ちの込められたセリフでした。

「そうね：このままじゃ私達、本当に村を出て行かなくてはなりませんよ。」

「確かに、そうだ：ようし、やるか、堤防を築くんか。」

「そうだ、そうだ。皆の村を皆の力で守るんだ。」
こうして幌向と水との長い戦いが始まったのです。川に囲まれた幌向。洪水で、多くの人々がたくさん苦勞したはずです。私達が演じた堤防づくりのあと、何度も襲ってきた洪水を、幌向の人々は力を合わせて乗り越えてきました。堤防や家が壊れても、幾度でもつくり直し、洪水に立ち向かってきました。

そして、ようやく幌向の長い長い夜が明けたのです。川は、静かにゆっくりと流れています。魚が住み、川沿いには家も建ち並んで、幌向の川辺には平和な風景が広がっています。

でも今、実際に川に行っって目につくものは汚れた水とゴミです。私はショックを受けました。こんなに汚してしまっっては、川のためにたくさん苦勞をした人々の努力を無駄にしてしまうのではないかと思いました。蛇口をひねればきれいな水がどんどん出てくることは、今の私達にとってはごく当たり前のことです。ですがそれは、先人達が水に対して多くの苦勞、時間、お金を注ぎ込んでくれたからできています。それなのに私達はそういう歴史を振り返ることなく、平気で無駄使いをし、汚しています。忘れてはいないでしょうか。今、洪水の心配もなければ、自由に水を使えるのも、すべて先人達のおかげだということ。先人達が望んでいた、水に困らない時代。それはやっとな実現しませんが、先人達は、私達に水を汚したり、無駄使いをして欲しくて水と戦ってきたわけではないはずです。この水に恵まれた今に至るまでの長い道のりを、私達は決して忘れてはいけません。先人達の苦勞をかみしめ、水を大切に使うこと。それが、今私達が一番にしなければならぬことだと思います。